

デジタル文化資源の未来

文化資源学の展望プロジェクト概要

情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設

人文学オープンデータ共同利用センター

鈴木 親彦

目次

プロジェクトについて	2
研究プロジェクト名	2
企画者	2
所属	2
プロジェクト内容	3
概略	3
背景	3
目的	4
方法	4
1.応募者による活動	4
2.学際的な情報交換・情報収集	5
期待される成果	5
参考となるアーカイブ活用事例	6
平賀讓デジタルアーカイブ	6
日本古典籍データセット	6
華北交通アーカイブ	6
企画者主要研究業績	7
論文	7
口頭発表	7

プロジェクトについて

研究プロジェクト名

「デジタル文化資源の未来」プロジェクト

企画者

鈴木親彦

所属

情報・システム研究機構 データサイエンス共同利用基盤施設

人文学オープンデータ共同利用センター

プロジェクト内容

概略

本プロジェクトでは、デジタル化された「文化資源」を「文化資源学」においてどう活用するか、研究・講演会・会員間の議論などを通じて考える。

背景

「文化資源」という言葉が人口に膾炙したといえる。近年はデジタルアーカイブ学会、東京文化資源会議など複数の活動で様々な文化資源や周辺情報がデジタル化され、アーカイブされて公開され始めている¹。また国立国会図書館でのデジタル事業や、ヨーロッパ最大の文化財ポータルサイト Europeana の取り組みの一部も「デジタル文化資源」と呼ばれる状況にある²。

これらの取り組みは非常に重要なものであり、学問のあり方を変革する可能性も持っている。その一方で公開者側の議論が中心となっている傾向もみられる。この状況が続くと、公開目的と利用目的が一対一対応となり、本来は広く活用できるはずのデジタル文化資源が「サイロ」化を起こしていく可能性も考えられる³(図1)。

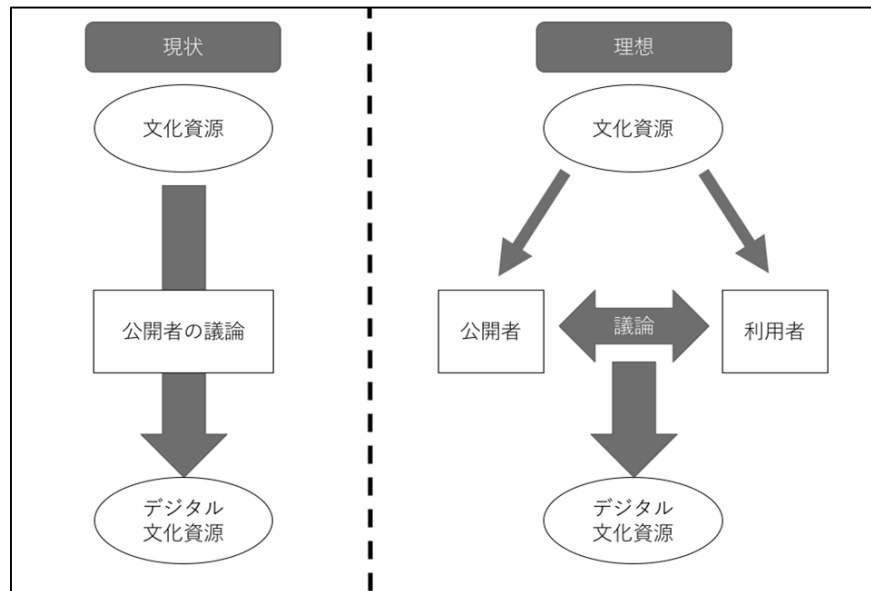


図1：デジタル文化資源公開の現状と理想状態

¹ デジタルアーカイブ学会 <http://digitalarchivejapan.org/home>

東京文化資源会議 <http://tohbun.jp/>

デジタルアーカイブ学会では「文化資源」を銘打ったイベント、「ナショナルな地域文化資源：地方紙の活用に向けて—地方紙原紙のデジタル化状況調査から見えてきたこと」(2017/7/13)や「地域の記憶と記録を今に活かす—地域文化資源デジタルアーカイブの役割—」(2017/11/24)を開催している。

² 2015年の段階で既に、国際シンポジウム「デジタル文化資源の情報基盤を目指して：Europeanaと国立国会図書館サーチ」が開催されている。

³ 『サイロ・エフェクト』ジリアン・テット、(文藝春秋)2016年

研究の対象となる場合でも、社会的な活動に還元される場合でも、デジタル文化資源の持つオープン性は、公開者の当初の意図を超えた広がりを持った利活用につながる可能性を持っている。これまで文化資源を主体的に研究してきた文化資源学こそが、研究・社会活動両面からの利用者として、この可能性を積極的に追求すべきである。

目的

文化資源学において活用できる「デジタル文化資源」の所在およびその活用方法を明らかにすることで、デジタルを活用した研究を促進する。

特定の分野にとどまらない学際的な活用事例を収集することで、デジタル文化資源のサイロ化を解消する。

利用者としての研究者の視点を、デジタル文化資源公開の動きにフィードバックする。

方法

応募者自身の研究活動と、学際的な情報交換・情報収集の2つの方法を取る。

1. 応募者による活動

美術史学出身で、現在は人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）に所属してオープンデータ活用を推進している状況を活かして、現在公開されているデジタル文化資源を活用した研究を行う。

具体的に想定できるのは、国際的な画像公開手法の標準として定着しつつある IIF（International Image Interoperability Framework）を活用した様式分析研究で、美術史と文化資源学、さらに人文情報学を横断する研究となる。

IIF は以下のような目標を掲げる国際的な動きである⁴。

- ・世界中での取り組みにより、見たことのないようなレベルでの統一的でリッチな画像ベースのリソースを研究者に対して提供する。
- ・画像リポジトリ同士の相互運用を支援する共通の API のセットを定義する
- ・画像を閲覧し、比較し、操作し、注釈をつける際に、国際的なレベルでのユーザエクスペリエンスを提供することができる画像サーバや Web クライアントのような共有技術を開発し、洗練し、実証する。

一例として、応募者は CODH での研究業務として IIF を活用した「奈良絵本顔貌データセット」を公開している。これはあくまでも機能のデモに過ぎないが、すでに公開者の意図を超えた新たな使い方の萌芽といえる⁵。

⁴ IIF については、<http://iif.io/>を参照。日本でも国文学研究資料館や慶應義塾大学、京都大学などが IIF に基づいた資料公開を行っており、東京大学もコンソーシアムに参加している。

⁵ <http://codh.rois.ac.jp/pmjt/curation/4/>

2.学際的な情報交換・情報収集

応募者個人では、そのバックグラウンドの範囲でしかデジタル文化資源を活用できないが、文化資源学会内外への呼びかけで、活用事例を交換する研究会を年間二回を目的に開催する。開催に際しては実際に活用を行っている専門家に依頼し、学会員へひらいた形での研究会とする。

またこの研究会は隣接する諸学会や研究分野と協力して行うことも可能である。具体的にはデジタルアーカイブ学会、Japanese Association for Digital Humanities、TEI 日本・東アジア SIG などが考えられる。

期待される成果

2年間の蓄積によって、文化資源学におけるデジタル活用研究の新たな軸を打ち立てることが期待できる。このことを通して、これまでデジタルアーカイブそのものやデジタル化の普及の活動、研究オープン化の動きとは一定の距離があった文化資源学会が、それらの動きを推進する研究団体として重要な位置を占めることが期待できる。

また、デジタルアーカイブの推進は、文化資源学にとって重要な博物館・美術館運営にとって今後必須の課題となる。従来の文化資源学の対象にとっても、プロジェクトの成果は大きく貢献する。

さらに、人文学に立脚した学際研究を展開してきた文化資源学会が、よりひろく情報学、図書館情報学などの分野と新たな連携を深める契機となりえる。

参考となるアーカイブ活用事例

具体的な研究会講師は今後選定するが、このプロジェクトに興味をもつ会員向けに文化資源アーカイブと活用例をいくつか紹介する。学会員からの積極的な情報提供も期待したい。

平賀讓デジタルアーカイブ

<http://gazo.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/hiraga2/>

東京大学工学部を中心に、海軍造船官であった故平賀讓（ひらが・ゆずる：海軍造船中将・第13代東京帝国大学総長）の遺した艦艇計画・建造関係の技術資料を中心とする資料（以後、平賀讓文書と記します）をデジタル化して公開。資料を横断検索可能にするとともに、研究者向けの機能ではミュージアム展示などを編成する支援も行っている。

日本古典籍データセット

<http://codh.rois.ac.jp/pmjt/>

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」においてデジタル化された古典籍のデータを、日本古典籍データセットとして公開。武鑑の構造データ化、奈良絵本の顔貌切り出し、くずし字のAIへの提供など、研究データとしての活用も行っている。

華北交通アーカイブ

<http://codh.rois.ac.jp/north-china-railway/>

華北交通の弘報用ストックフォト（華北交通写真）を華北交通が事業を行っていた交通網とリンクさせ、写真のテーマや撮影場所から華北交通の活動を明らかにする研究データベースのプロトタイプ版。展覧会「秘蔵写真 伝えたかった中国・華北」とも連携した。

企画者主要研究業績

論文

1. 「IIIF Curation Viewer が美術史にもたらす「細部」と「再現性」 絵入本・絵巻の作品比較を事例に」鈴木親彦・高岸輝・北本朝展、『じんもんこん 2017 論文集』、2017 年（査読有・採録決定）
2. "Designing Research for Monitoring Humanities-based Interdisciplinary Studies: A Case of 文化資源学 [Cultural Resources Studies] in Japan", Yusuke NAKAMURA・Chikahiko SUZUKI, Journal of JADH Vo.2, pp.60-72, 2017 年（査読有）
3. 「文化資源学とテクノロジー：分科会「文テク」の軌跡と展望（特集 文化資源学を支えるテクノロジー）」鈴木親彦『文化資源学』14 号、pp. 125-141、2016 年（査読誌への依頼寄稿）
4. 「出版流通の文化資源的分析 戦後出版流通改革の再評価から」鈴木親彦、東京大学大学院人文社会系研究科博士予備論文、2015 年（文化資源学・学位論文）
5. 「文化資源学の射程 一大学院教育プログラムへの人文情報学的アプローチ（研究報告）」鈴木親彦・中村雄祐、『文化資源学』13 号、pp.91-101、2015 年（査読有）
6. 「3D プリンティングによる「つくりもの」とテキストマイニングを活用した、神田祭附け祭り復元プロジェクトの可視化」鈴木親彦・中村雄祐、『可視化情報学会誌』35(Suppl.1), pp.47-50, 2015 年（査読無・オーガナイザーの依頼による講演と執筆）
7. 「ジャパンプックセンターの再評価 出版流通研究の拡張可能性を視野に入れて」鈴木親彦、『出版研究』45 号、pp.159-179、2015 年（査読有）
8. 「修士論文とシラバスを対象とした人文学・社会科学の学際領域の可視化」鈴木親彦・中村雄祐・増田勝也、『可視化情報学会誌』34 (Supple.1)、pp.63-66、2014 年（査読無・オーガナイザーの依頼による講演と執筆）
9. 「MIMA Search を用いた修士論文とシラバスのテキスト分析「文化資源学の射程」研究プロジェクト報告」中村雄祐・美馬秀樹・増田勝也・鈴木親彦、『研究報告人文科学とコンピュータ (CH)』2014-CH-102(5)、pp.1-5、2014 年（査読無）
10. 「出版流通の再評価 文化におけるストック形成に焦点を合わせて」鈴木親彦、東京大学大学院人文社会系研究科修士学位論文（文化資源学・学位論文）、2012 年

口頭発表

1. 「オープンサイエンス時代における「研究・データ・出版」：「日本古典籍データセット」と『『東洋文庫所蔵』貴重書デジタルアーカイブ』を事例に」鈴木親彦、日本出版学会秋期研究大会、2017 年（査読有・採録決定）
3. 「人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）の紹介」鈴木親彦・前田忠彦、「言語研究と統計」夏季研究会、2017 年（招待講演）

4. 「青空文庫の構造を読む－人文情報学による試み鈴木親彦」出版学会春季研究発表大会、2015年（査読有）
5. “Scope of Cultural Resources Studies: Text-Mining of a Newly Created Interdisciplinary Graduate Program with MIMA Search”, Yusuke NAKAMURA・Chikahiko SUZUKI・Hideki MIMA・Katsuya MASUDA, Japanese Association for Digital Humanities Conference 2014、2014年（査読有）
6. 「デジタル・テキストが深める研究者の「読み」－Digital Humanities プロジェクトの実践事例から」鈴木親彦、日本出版学会秋季研究発表大会、2013年（査読有）
7. 「文化資源学の射程－人文情報学のアプローチによる分析」中村雄祐・鈴木親彦、文化資源会議第24回研究会、2013年（査読有）